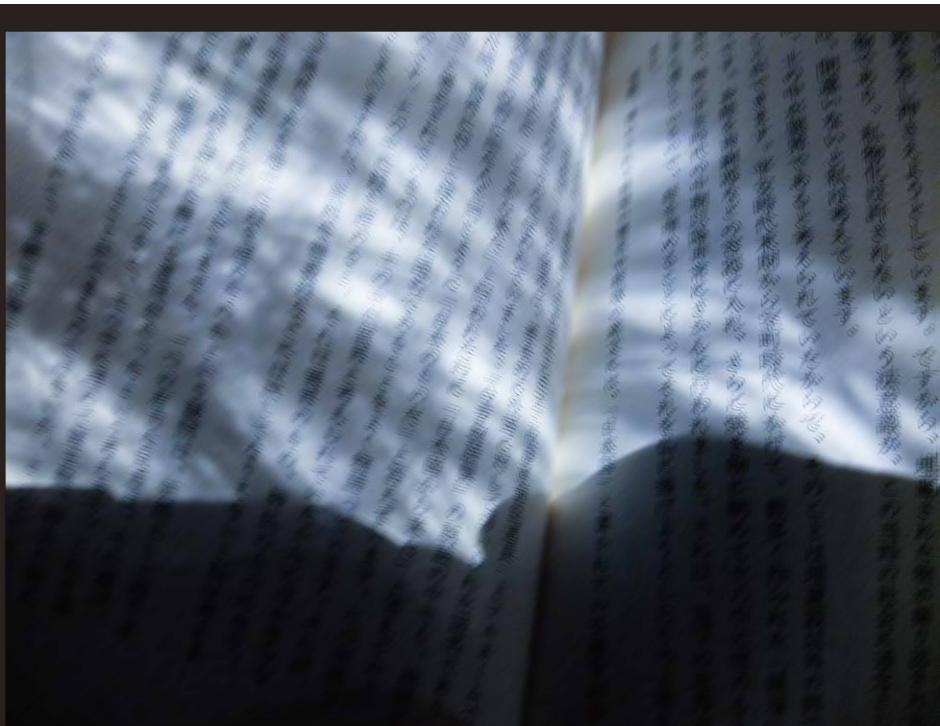


# 琉球大学学術リポジトリ

## 第12回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2019-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43965">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43965</a>

第12回  
びぶりお文学賞  
受賞作品集



詩部門

# 共謀という穴へ捧げる五の詩篇

酢橋 とおる

琉球大学

第12回  
びぶりお文学賞  
受賞作品集



詩部門

共謀という穴へ捧げる五の詩篇

酢橘 とおる

琉球大学

第十二回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

第十二回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集 目次

小説部門受賞作 該当作なし

小説部門佳作

九月二十七日の決意

赤嶺 佳帆 6

(琉球大学・法文学部人間科学科二年)

『窓際のシユードラ』

運天 香緒 22

(沖縄国際大学・総合文化学部日本文化学科三年)

詩部門受賞作

共謀という穴へ捧げる五の詩篇 42

酢橘 とおる 42

(琉球大学・法文学部国際言語文化学科三年)

詩部門佳作

Plastic romance 48

かねしろ 茉衣 48

(沖縄国際大学・総合文化学部英米言語文化学科四年)

喜劇行

荒井 青 50

(琉球大学・教育学部生涯教育課程四年)

人の檻

豊見山 尚樹

52

(沖縄国際大学・経済学部経済学科四年)

卵割

古波藏 唯

56

(沖縄国際大学・総合文化学部日本文化学科四年)

永久不滅の麻葉

秋雨 一也

60

(沖縄国際大学・産業情報学部企業システム学科三年)

歩く

玉城 琉舞

64

(沖縄国際大学・総合文化学部日本文化学科四年)

選評小説部門

68

選評詩部門

84

選考経過

93

琉球大学びぶろお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」育成の一環として、言語力(読む力、書く力)を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。第七回(平成二十五年度)から、応募資格が沖縄県内の大学生(高等専門学校の場合は本科四年次以上)及び大学院生に拡大されました。

装  
丁  
  
上  
村  
  
豊

# 小說部門



小説部門佳作

# 九月二十七日の決意

赤嶺 佳帆

○

ぼくは今日、お姉ちゃん秘密を知ってしまった。

学校からの帰り道、校門前をひとりでもくもくと歩いているお姉ちゃんを見かけた。お姉ちゃんの耳はイヤフォンで塞がれていて、周りにはたくさん生徒が、何人かに分かれておしゃべりしながら楽しそうに歩いている。そう、この状況、お姉ちゃん、浮いているよ。お姉ちゃんだけが、ひとりで音楽を聴いて歩いている。周りに見られていないと思うけど、気にされないと思うけど、お姉ちゃんは気にしているよね。見られていると思っっているよね。そういうぼくもひとりだから、大丈夫だよ、と念を送りながら、ぼくはお姉ちゃんを眺めていた。

お姉ちゃんは小学五年生、ぼくは小学二年生。ぼくたち姉弟は、同じ方向の同じ家に帰るのに、並んで歩いて帰ったことがない。仲がいいと言えるのだろうか。お姉ちゃんはぼくのこと

を忘れていつも先に帰ってしまう。ぼくはいつも、校門の前で待っているのに。本当にお姉ちゃん、ぼくのことを忘れているのだろうか。ぼくと並んで歩きたくないだけじゃないかと、ぼくはそう思う。だから、一緒に歩こうと言ったことはないし、並んで歩かない理由を聞いたこともない。でも、どうやらぼくの存在には気づいているらしい。だって、校門を出た時から数えて三回は目があった。ぼくたち姉弟は並んで歩いて帰ったことはないけど、いつも一緒に帰っているようなもの。ぼくたちはそういう特殊な姉弟なのだと思う。

今日は、雲ひとつなく晴れている気持ちの良い天気だ。ところで、実際に雲ひとつない空を見たことがあるだろうか。ぼくは見たことがない。探したら空のどこかに必ず雲が見つかってしまう。今日も、ほら、ぼくには見える、少し遠くなった学校の上に薄く横に広がった雲が。何という名前の雲なのだろう。お姉ちゃんも、見ているかな、と思う。

学校から家の間にはいろんなものがある。校門を右に出るとしばらく下り坂が続く。下り坂の歩道には桜が植えられていて、春になると、それはもう見惚れて学校に行きたくなくなるくらい綺麗な景色が広がる(だいたいいつも学校には行きたくないけど)。いまは、桜の花は咲いていない。代わりに、花壇には小さな秋桜が咲いている。僕は秋桜が大好きだ。なぜなら、お姉ちゃんの誕生日は九月二十七日、その日の誕生花は秋桜だからだ。お姉ちゃんのことを大好きなように、秋桜のことも好きだ。下り坂の途中で左に曲がると、ぼくの家がある左側には大きな鉄塔が見えてくる。鉄塔からは左右に何本も電線が伸びていて、ぼくはいつもその電線に小さな忍者を飛び回らせながら歩く。歩く。しばらく歩くと、電線は町の小さなパン工場が遮つ

て、途切れてしまう。ぼくは忍者を消し去って、パン工場から溢れ出るいい匂いをひとつ残らず吸い取ろうと、何度も大きく深呼吸をしながら歩く。前を見ると、お姉ちゃんも、深呼吸をしている、ように見える。見えるだけだから、実際はしていないかもしれないけど。

もうすぐぼくたちの家に着く。パン工場を過ぎて次の路地を左に入る。ここから、舗装されていない砂利道に突入する。ぼくの石蹴り大会が開幕した！今日は、ぼくの足元の、この、赤褐色の、多分すぐ削れてしまう石と土の間のような石を蹴って、家までたどり着くことができるのか。あれ？お姉ちゃん、お姉ちゃんもやってる！。よそ見は禁止、赤褐色を運べ！ゴールはすぐそこ！見えてきました、今は亡き愛犬ゴールドの家、あそこがゴールだ！シュート、決まったー！

気づけばぼくは、お姉ちゃんを追い越してしまっていた。お姉ちゃんは、ぼくの三步ほど後ろでシュート体制に入った。手を振って足を引いた、そのとき、

お姉ちゃんのイヤフォンが手に引っかけり、ポケットから音楽プレイヤーが飛び出した！

と思ったが、イヤフォンの先には何も付いていなかった。お姉ちゃんは、飛び出したイヤフォンの先を慌ててポケットに突っ込むと、顔を真っ赤にして、家の中に入ってしまった。扉を強くしめた音の残響がまだする。一瞬静まり返ったように感じたが、次には鳥のさえずり、風に吹かれ木々がざざめく音、そして家の中に人がいる気配がした。

これはもしかしたら、知ってはいけないことだったのかもしれない。ぼくはお姉ちゃんの秘密を知ってしまった。お姉ちゃんのイヤフォンからは、何も流れていないんだ。お姉ちゃん、イヤフォンで音楽を聴くふりをして、いつも何を聴いていたの？鳥のさえずり？風に吹かれ木々がさざめく音？そんなわけないよね、お姉ちゃん、全部聴いていたんだ。家の中の、声。学校の、みんなの、声を。

ぼくは、シユートされることのなかった、お姉ちゃんの今日のボール(石)をゴールドの家に蹴って、家の中に入った。



今日は、お父さんの車を洗う日だ。洗車場に行くのは月一回、五百円貰えるからという理由で、私が小学四年生のときから始めた。最初は、お父さんも手伝ってくれたんだけど、最近は何となく、手伝ってくれたことがあるのは最初の二回だけ、もう、ひとりで洗えるようになったと思っただのか、車を置いて、向かいの古本屋に入っていく。

この間読んだ雑誌で、「洗車はタイヤから。」と言っている人がいたことを思い出した。それで、私もタイヤから洗うことにした。でも、タイヤって、黒くて汚れがよく見えない。汚れがついているのか、ついていないのか、落ちたのか、わからない。それに、車を洗ってすぐに車を動かして、そのときにすぐ汚れてしまう。タイヤが一回転するだけで汚れがつく。家に着

く頃には、元に戻っているのではないか。それを考えて、洗う気をなくしかけていたところ、

「おう、嬢ちゃん。久しぶり、元気か。」

はっとおじさんだ！また来た、このおじさん。本当の名前は知らない、でもおじさんの顔とおじさんに関するすこしのことは知っている。

「こんにちは。元気だよ。」

多分毎日この道を通っているこのおじさんは、私が洗車していると毎回、商店がある方向から現れる。そして、洗車場の中の全ての車の周りを、洗車している人に声をかけながら一周して、多分家の方向に消えていく。どうやら今日も向こうに看板が見える商店から来たようだ。買い物袋を持っている。

「今日も、洗っているのか、偉いね。」

「おじさんこそ、いつも会うね。」

「手伝うか。」

おじさんは、いつもそう言う。でも、実際に手伝ってくれたことはない。隣に立って、ずっと話している。私が話すときもある。はっとおじさんは、私の唯一のおしゃべり相手だ。さつきまで考えていたタイヤの話をするとおじさんは笑って、

「そんなこと言ったら、全部そうだろう。車、家、学校、会社、なぜみんな掃除するんだと言う話になるじゃないか。」

と言った。たしかに、と思った。そして、快適に使うために掃除をするんだ、と言う結論を心

の中で出した。

「でも、お嬢ちゃんは偉いよ、お小遣い稼ぎをしているんだろう。世の中には、何もせずにお金をもらおうとする奴がいるな。俺は、大人でも子どもでも関係なく、そういうのはだめだと思う。」

「でも、世の中には、働いて、お金もちになる人とお金もちにならない人がいるよ。だったら、働いてもお金もちにならない人が、お金をもらってもいいんじゃないの。」

「そう考えるか。でも、世の中は不平等なんだからね。そしてお嬢ちゃんは、お金がたくさんあったら、幸せになれるのかい。」

なれる、と反射的に言いかけて、私ははっとした。おじさんは、毎回私をはっとさせることを言う。「はっとおじさん」それは私の中でつけたあだ名。はっとおじさんはいつも私を褒めて、私をはっとさせる。幸せかあ、私も幸せになれるかな。

「まあ、俺は、今は働いていないがな、はっはっは。」

この言葉を聞いて、私の「はっ」を返して欲しいと思った。でも、おじさんはいつも、幸せについてお話ししてくれる。そんなおじさんが、私は好きだ。

「じゃあおじさんは、どうやって生活しているの。」

はっとおじさんは、照れくさそうに、そして自慢げに答えた。

「俺は昔、プロレスラーだったんだ。地元では一番強かった。毎週末の大会の賞金がまだ残っているのさ。膝をやっちゃって、もう引退したけどな。」

「おじさん！プロレスラーだったの！すごい！」

たしかによくよく見てみれば、背が高く、からだも大きい。いやあ、たいしたことないさ、と言いながらおじさんは、本当に照れていたように見えた。

ところで、駐車場の左側に私とはっとおじさんの様子を、さつきからずっと見ている女の人の（私のお母さんよりもっと年上に見える）がいる。しまった、目があったってしまった。おじさんは、私の目線に気づいたようで、後ろを振り返る。おじさんの様子が明らかに変わった。慌てたように、

「それじゃ、俺はそろそろ行くよ。」

と言っている最中に、もうその女の人は早足でここに向かってきている。そして叫んだ。

「おい、あんた！買い物済んだら早く帰ってきて言ってた。だろ！またプロレスラー時代の自慢話ばかりしてまわって、もう賞金なんてないでしょ！年金生活なんだから。」

まあ、なんと口調の強いこと。そして、おじさんの話、ちよつと盛られていた。

「ご、ごめん。」

おじさん、さつきまでひょうひょうとしていたのに、すっかり萎んでしまった。

「ごめんなさいね、うちの夫が、いっつも手当たり次第に話し相手見つけて話し込んでちゃって。迷惑でしょ。」

この人、奥さんだったんだ。

「あ、あの、全然、」

「ほら、もう行くよ。早く行かないと病院閉まっちゃうじゃない。」

私が話し終わる前に、畳み掛けてくるように話す奥さん。

おじさん、病院行くの？もしかして、病院に行きたくないの？おじさん、なんで病院行くの？頭に浮かんだ質問は、言葉に出せなかった。奥さんがほとんどおじさんを引つ張るようについて、歩いていってしまったからだ。

「じゃあな、お嬢ちゃん。」

「またね。」

すっかり元気がなくなつたおじさんを見送つて、私は、自分の洗車が全然終わっていない(まだ始めたばかり)ということに気づいた。どうしよう、お父さんとの約束の時間の十七時まで、あと五分。もう面倒だから、ホースで水をかけ、目立つ汚れだけ落として、終わりにしよう、そうしよう、と決めた。



はつとおじさんにはつとさせられた話をお姉ちゃんから聞いて、ぼくもはつとした。働いてお金をもらう、これが正しい、とぼくも思った。でも、おじさん、働いていないんですよ。つて聞いたら、お姉ちゃんは、昔はプロレスラー、今は引退したんだよ。と教えてくれた。

ぼくの「はつ」とお姉ちゃんの「はつ」を比べると、お姉ちゃんの方が大きかつ



たみたい。ぼくにはお姉ちゃんが、幸せになるために生きることを決意したように見えた。毎朝、早起きして家で三十分勉強してから学校に行くんだ。ぼくには、お姉ちゃんの考える幸せがなんなのかよくわからないけれど、最近のお姉ちゃんを見てみると、きつとお姉ちゃんは幸せになる予感がする。今もまだ、多分音の聞こえてこないイヤフォンをつけたまま登下校するけれど、こんなに頑張っているから、きつと大丈夫。最近、学校でお姉ちゃんとすれ違おうとき、お姉ちゃんと一緒にいる人がいる。友達ができたらしい。一ヶ月くらい前に転校してきた子だという情報は仕入れたが、それ以外は何も知らない。まあ、お姉ちゃんが楽しそうだから、それでいい。

お姉ちゃんは、小さいときから、困ったらだいたいぼくを呼ぶ。でも、ぼくはお姉ちゃんの問題を解決に導いたことはない。いつもアイデアを出すのはお姉ちゃん、実行するのもお姉ちゃん。お姉ちゃんはぼくがそばにいて安心してできるらしい。ぼくがまだ三歳の頃、お姉ちゃんの夢を見たことを覚えている。

遠くに線路が見える丘で、二人でピクニックをしていた。夢の中では、ぼくは随分と大きくなっていった。お姉ちゃんは、多分大人だったと思う。

「明日はどこ行く。」

「明日は、仕事だよ。」

「じゃあ、来週は。」

「観たい映画があるの。」

「映画か、いいね。」

そんな夢。ぼくは目が覚めたとき、お姉ちゃんに「ピクニック、楽しかったね。」と言われたことを、今でも覚えている。二人で同じ夢を見ることってあるのかな。そんな繋がり、ぼくとお姉ちゃんの繋がり。

ぼくは最近、お姉ちゃんがいつも音楽プレイヤーにつながっていないイヤフォンを耳にしている理由をずっと考えている。お姉ちゃんに、ぼくの声は届くのだろうか。

ねえお姉ちゃん、どうしてなの？ぼくとお姉ちゃんの思い出が溢れ出してくる。幸せになりたいなら、お姉ちゃん、もう逃げちゃだめだよ。今までは良かったかも知れないけど、もう、だめじゃないかな。ぼくには分かるよ。お姉ちゃん、ずっと苦しかったんだよね。学校でも家でも、誰とも話さずに、ずっとひとりだったんだよね。ぼくは分かっているよ。でも、ぼくじやだめなんだよね。ぼく以外の誰かに、だれ？誰なの？誰に気づいて欲しいの？お姉ちゃん、ぼく、分かっているよ。ぼくじや、だめなの？一番誰に気づいて欲しいの？

なにが、何が分かるの。分かんないよ、私は。いつもそうやって分かったふりして、「分かる」ってという言葉を使って。それが、私を縛るの。あなたの存在が、私の邪魔をするの。分か  
つてよ。

ちがうよ、ぼくを作ったのはお姉ちゃんだよ。確かにぼくはお姉ちゃんの弟だけど、お姉ちゃんがいるから、ぼくも存在しているんだ。ぼくも苦しいよ。お姉ちゃん、ぼくのことなんか忘れてよ。ぼくのこと、気にしなくて良いよ。お姉ちゃんは、何も悪くないよ。でも、逃げないで。お姉ちゃんは、ぼく以外の人としか幸せになれないよ。ぼく以外の人たちと生きて幸せになるんだよ。

言葉が出ない。何も聞こえない。私の声が、私の声だけが回り続けるように聞こえる。全部私の声だ。うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！私は逃げてなんかない。耐えていたの。私は悪くない。ねえ、いつもそばにいてくれたじゃない。うるさい、うるさい！うるさい！！

「うるさい！！！」

私は私を忘れて、ついに叫んでしまった。言葉が出ない。ドンドンドンドンツ、と階段を駆け上がる音。

「どうした！どうしたの？大丈夫？」

お父さんの声。お父さんの声が聞こえる。聞こえるだけ。何を言っているのか聞き取れない。涙が溢れて止まらない。息がうまくできない。言葉が出ない。弟は？どうして？私は幸せになるんだよ。幸せに、幸せに。なれる？



目が覚めてしばらく、状況が飲み込めなかった。白い、白い。周りが白くて明るい。朝の光と部屋の色。

「起きた、起きたぞ！」

お父さんの声。

「よかった、よかった。」

お母さんは私に抱きついていて。ちょっと苦しい。あれ、二人の私のお母さんが、揃っている。

どうやらここは病院らしい、というか病院だった。目が覚めて、それから全部の検査が終わる頃には外は暗くなっていた。私は、とにかく眠かった。疲れていた。しばらく眠り続けた私は、どうやら精神的に参ってしまっていたらしい。お医者さんは、

「君は何も悪くないよ。たくさん休んで、ゆっくり治そうね。」

と言ってくれた。私は、何を治すのかわからなかったけど。でも、みんな優しくかった。そして、私のお父さんと新しいお母さんを叱っていた。

「どうしてこうなるまで気づかなかったのですか。」

「最近、変わった様子ないって、どうしてこうなるまでわからなかったのですか。」

わたしは知っている。わたしの家族が私のことなんて知るはずないということ。興味が無いというより、弟のことで、自分のことで、ずっと、ずっと、わたしも、家族も、みんな、頭

がいつばいだったんだ。



はっとおじさんが亡くなったと聞いたのは、わたしが退院した一ヶ月後のことだった。

「あなたのお話をいつも聞かされていたのよ。あの人は、あなたのこと、俺と似たものを持っている、と言っていたわ。」

お葬式に行ったとき、奥さんは私に優しく声をかけてくれた。おじさんは、最後の最後まで粘って病院に行かなかつたと聞いた。わたしがはっとおじさんと似たものを持つている？ 考えても、考えても、よくわからなかつた。

私の弟が亡くなったのは、私が六歳の時。弟は三歳だった。交通事故。運転手は私のお母さん。私も怪我したけど、私はちゃんと覚えていない。どんな事故だったのか、どんな怪我をしたのか。車の中で同じ夢を見ていた私と弟は、事故に遭い、そのまま離れ離れになってしまった。弟に言った最後の言葉を、私はまだ覚えている。弟には、届いたのだろうか。

事故が起きてから、私の家族はバラバラになってしまった。お父さんとお母さんは話さなくなつた。話しても、喧嘩ばかり。お母さんは、自分が運転していたことを責め、お父さんもお母さんを責めた。お母さんが運転することはもうなかつた。お母さんは、毎日、毎晩泣き、自傷行為を繰り返した。それは日に日にエスカレートし、ついに私の首を絞めようとしたところ

をお父さんに取り押さえられて、それから精神科に入院した。私がお母さんに最後に会ったのは、三年前だった。病院にひとりで行った。どうしようもなく寂しくて、前みたいなお母さんに戻っていたらいいなと思って、行った。でも、そんなことはなく、お母さんは、痩せ細って、まるで別人みたいだった。それでも私のことは覚えていてくれた。私を見るなり、泣いた。私も泣いた。二人で泣いて、泣いて、面会時間が過ぎた。

それから、お父さんは再婚した。いつ、お父さんとお母さんが離婚したのかは知らない。私は、お父さんが再婚したことを、いまでも信じられずにいる。でも、お母さんが入院するときには、もうその覚悟がお父さんにはあったと思う。新しいお母さんは、普通の人だった。普通。お父さんも、普通になりたかったのかな、と思う。新しいお母さんには、お母さんっていう感じの雰囲気はあった。でも、私のお母さん、ではなかった。私には寂しかった。とにかく寂しかった。学校も楽しくないし、家も楽しくなかった。

そんなときに、はっとおじさんと出会ったんだ。普段誰とも話さなくなっていた私は、おじさんだけには話せた。はっとおじさんは、話したくなるような何かを持っていた。私は、いろんな話をした。家族のこと、学校のこと、なんでも。おじさんはいつも言った、

「目的は、幸せになることだ。」

と。  
弟のことを考える。弟と私はいつも一緒だった。辛いとき、私の心の支えは、いつも弟だった。弟が見てくれていると考えるだけで、大丈夫だった。誰にも気づかれなくても、弟だけは

ちゃんと、心の中にいた。最近はずっと弟がそばにいる感覚だった。でも私は、弟のいない世界で、生きていかないといけないらしい。それが、一番つらいことだったから、私はその事実からずっと逃げていた。弟のいない世界を、平気で生きる人たちの声を聴きながら、この世界に入ることはできないと思っていた。そんな状況を変えてくれたのは、やっぱりはっとおじさんだった。はっとおじさんと出会って、弟のいない世界でも、幸せになれるかもしれないと思った。幸せになりたいと願った。

はっとおじさん、ありがとう。

気持ちを込めて、線香をあげた。

向こうから、はっとおじさんの奥さんが袋を持って歩いてきた。

「お嬢さん、今日、誕生日でしょう。あの人、プレゼント、用意していたのよ。どうぞ受け取って。」

びっくりした。私も忘れていたこと。おじさん、そんなことを覚えていたの。

「ありがとう。ありがとうございます。」

おじさんの気持ちだが、本当に嬉しかった。袋には秋桜の絵が描かれている。袋を開けてみた。中身は、洗車グッズだった。私は笑って、そして泣いた。おじさんらしかった。奥さんも笑いながら照れたようにあやまって、泣いていた。

赤嶺 佳帆（あかみね かほ）  
／琉球大学・法文学部人間科学科二年



## 小説部門佳作

# 『窓際のシユードラ』

運天 香緒

### 遺書

これは私が、自身の罪を告白するための手紙です。あの日あの教室でいったい何が起きていたのか。なぜ彼女がいじめに遭っていたのか。なぜ彼女が自殺に追い込まれたのか。それを明確にするための物であり、決して、私自身の罪を正当化する免罪符ではないと、遺書の名のもとに誓います。しかし、どうしても私の視点になり、彼女の本心を語ることはできません。あくまで、私から見た出来事で、私の思ったことを連ねる文になってしまふことを、お許しください。

彼女、島田若菜が亡くなって、今日で半年が過ぎました。彼女の両親は学校内でのいじめが原因ではないかと訴えています。が、学校側は、一枚のアンケートを配っただけの対応でした。そんなアンケートを取ったところで、匿名といっても、みんな「しらない」に○を付けるだけで終わり、記者会見で「いじめは認められなかった」と報告されるだけでした。あの教室には、

確かにいじめがありました。私は毎日、この目で、この耳で、この体で、それを感じていました。

私と彼女は幼稚園からの友人でした。入園式で隣だったというだけの縁ですが、母親同士が意気投合したおかげで、私と彼女はいつも一緒にいるようになりました。いつも明るくて元気で、優しい彼女は、他のクラスのみんなからも、先生からも好かれていましたし、私が男子にちょっかいを出されているといつも助けてくれました。私はいつもそんな彼女を誇らしく思っていました。強くて優しい彼女はどんな時も私のそばにいてくれて、頼れる自慢の幼馴染だったのです。

私がこの高校に入学したきっかけは、通っていた小学校でのいじめから逃れるためでした。若菜とクラスが分かれ、落ち込んだ私に新しい友達ができるはずもなく、私は孤立し、クラスの男子からは「ぼっち」だと揶揄されるようになりました。女子からは無視をされ、陰口をたかれるようになり、それはエスカレートしていきました。毎日毎日、私は悪意のある視線に、言葉に、空気にのまれていきました。

ある日、クラスメイトの一人が、教室の私のロッカーに、誤って花瓶の水をかけてしまいました。花は二週に一回、担任の先生が新しく生けていました。いつもは先生が花瓶を管理していましたが、ちょうどいけ替えの前日に先生がインフルエンザにかかり、「学校にはしばらく出られない」と、クラスに連絡が入りました。いけ替えてくれる花の主人はおらず、花は徐々に枯れていき、水は汚れ、コバエが飛ぶようになりました。それを見かねた子が花瓶の水をかえようとして、私

のロッカーにその汚い水をこぼしたのです。私はその場にいませんでしたが、ボウフラの浮いていそうな汚らしい水が、「私のロッカーだけ」にかかったのです。教室に帰ってきた私はその水が放置されていたのを見て、ひどい悔しさと涙がこみ上げてきました。ロッカーに入っていた私の教科書や体操シューズは水浸しになり、お気に入りのペンケースも、幼馴染のおそろいのかばんも、汚い水でダメになり、私のロッカーの悪臭は丸一日消えませんでした。私を率先して「ぼっち」とからかっていた男子は、私を見るたび「臭い、近寄るな」などと言ってきて、「私に近づくと臭いが移る」とほかのクラスにまで吹聴して、たった一日で、私は学年の笑いものになっていました。この理不尽に耐えきれなくて、私は幼馴染、若菜のところに行きました。彼女ならきつとわかってくれるだろう。きつと今まで通り接してくれるだろうと。そう信じて、ある日の昼休みに彼女のクラスに行きました。しかし、しばらく会わないうちに、彼女は変わっていました。若菜は私を一瞥すると、気まずそうに眼をそらしたのです。

その出来事をきっかけに、無視や陰口は暴言や暴力に変わっていききました。今思えば、あの時涙さえ見せていなかったら、こんなことにはならなかったのだらうと思います。

クラスの男子だけでなく女子も、私を奴隷として見るようになりました。私からお金を搾取することは当たり前。私でストレス解消することも当たり前。毎日毎日少しずつ、私の何かがすり減っていきました。それから半年近くたった日、両親は私が学校でいじめを受けていることに気が付きました。きっかけは、私が両親の財布からお金を盗んだことでした。定期的に定額で減っていくお札に母は気づき、リビングに呼び出され、発覚しました。

幸い、両親は私を慰めてくれ、叱ることは一切ありませんでした。その日、私と両親は校区を替える決断をし、由緒正しい、私立桜庭女子高校付属中学を受験することになりました。

私立桜庭女子高校は、付属中学からの持ち上がりで入学する生徒が多く、編入生はクラスで多くて二、三人。私も中学校からの持ち上がりで、クラスにいる編入生は、若菜だけでした。私のクラスは四十名、その内の三分の二が、お金持ちの家の子で、いわゆる「お嬢様」のような人たちでした。小学校までは私も共学の市立校に通っていましたが、女子の世界ではよくある「派閥」というものに慣れたのは、中学二年の頃でした。高校のクラスでもその「派閥」はあり、私のクラスの大半は、高崎のぼらさんが中心になったグループに所属していました。のぼらさんのお父様はこのあたりの土地を所有していて、お母様もいとお家柄の出身で、のぼらさん自身も学びを怠らない立派なお嬢様でした。

私とのぼらさんとの接点は、私がこの学校にまだ馴染めていなかった、中学一年の頃です。みんなと違って庶民の私の出の私は、友人との放課後の付き合いや、買い物といったものに参加できず、最初にできた友人も、付き合いの悪い私からだんだん離れていきました。一人、孤立していた私に声をかけてくれたのが、隣のクラスにいたのぼらさんでした。のぼらさんは私を自分のグループに入れ、私をよく気にかけてくれました。のぼらさんがなぜ私に声をかけてくれたのかはいまだに見当が付きませんし、もしかしたら、いい使い走りを手に入れたくらいにし

か思っていないなかったかもしれないませんが、とても優しく接してくれました。そして、のぼらさんという後ろ盾をもらった私の学校生活は大きく変わりました。離れていった友人は私に話しかけてくれるようになり、今まで私に興味も抱かなかったクラスメイトたちや、教師たちさえも、私を認識するようになりました。私がのぼらさんと友人というだけで、私の学校生活は大きく変わり、私はいつの間にか、のぼらさんのことを「頼りになる優しい友人」と思うようになりました。

二年に進学する頃には、私は「のぼらさんの友人」が板についてきました。のぼらさんは庶民の私に気を使ってか、放課後よく通っていたカフェには行かず、私や他のとりまき達を屋敷に呼び、ティータイムを楽しんで、時には夕食まで食べさせてくれました。最初はとても申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、申し訳ないと思うことが失礼だと気付き、そう思うことを止めました。時々、のぼらさんは「普通の暮らしがしてみたい」と言うので、のぼらさんと二人でスーパードに行ってみたり、公園のブランコで遊んだりもしました。私とのぼらさんは、幼稚園生時代の私と若菜のようで、とても心地が良かったのです。

高等学校に入学してから、私とのぼらさんはようやく同じクラスになることが出来ました。座席表を見て私とのぼらさんが隣であることが分かり、早速荷物を置きに教室に入りました。のぼらさんの席は教室奥の後ろから三番目の窓際で、私はその隣でした。先に席についていたのぼらさんは教室の入口に立つ私を見てふんわりと微笑み、「早くおいでよ」と言わんばかりに手招きをしました。SHRの鐘が鳴ると、浮き立っていた教室は静かになり、それぞれが自分

の席に着きました。しかし、のぼらさんの前の席はいつまでも空席のままでした。先生が教室に入ると、朝の挨拶が始まります。皆一斉に席を立ち、手を揃え、綺麗にお辞儀をします。頭を上げると、先生と一緒に入ってきた一人の生徒が目に入りました。そして皆が着席したのを確認すると、先生はこう言ったのです。「今年、このクラスに編入がありましたので紹介します。島田若菜さんです。彼女は一般入試枠で入学が決まりました。みなさん、仲良くするように」

一瞬、頭が真っ白になりました。私がいじめられていたことを知っている人間がここに入学してしまった。またいじめがおきてしまう。そう思った私はもう、島田若菜を親友と思つていませんでした。むしろ、そう思ってしまったことにショックを隠し切れませんでした。若菜の席はのぼらさんの前、私の左斜め前の席。こっちに向かつてくる彼女と目が合わないよう、私はずっと膝の上に置いた自身の拳を見つめていました。SHRが終わると、若菜は早速近くにいる生徒に話しかけていました。私はそれに巻き込まれないように、そつと席を立つて、一時間目の授業の鐘が鳴るギリギリまで、お手洗いの鏡の前に立つていました。

教室に戻ると、トイレに行つたきり帰つて来なかった私を、心配してくれたのぼらさんがいました。体調が悪いのか心配してくれましたが、その日は打ち明ける元気もなく、次の日もその次の日も、適当に誤魔化しては話題を避けていました。

しかしある日、とうとうのぼらさんに問い詰められる日がやってきました。のぼらさんは私と若菜が知り合いだったのではないかと気づき、放課後に二人きりの教室で、何があつてそう気まづくなつてきているのかを聞いてきました。私は通つていた小学校でいじめにあつていたこと、

若菜にも冷たくあしらわれてしまったことを、のばらさんに打ち明けました。のばらさんは私が話し終わるまで、黙って聞いてくれました。私が全て話し終わる頃には、日も沈み始めて、部活動をしている生徒がストレッチをしている声が聞こえてきて、自分がどれだけこの話に時間をかけていたのかを実感しました。その間、のばらさんはずっと聞いてくれていたことも理解し、急に申し訳なくなつて、「すみません」と謝ろうとすると、のばらさんは「あなたは今までずっとそれを隠していたのね。いつでもどこか、私達と一線置いているように思っていたけど、そう言う事だったのね。」とポツリと呟いて、私の両手を取つて、まっすぐ私の目を見つめてきました。のばらさんは私の苦しみをも包み込んでくれたように思えてきて、その日、私は初めて、嬉しさを涙を流してしまいました。

次の日から、私は若菜におびえる事は無くなりました。たとえあのいじめをこの学校の生徒に吹聴されたとしても、この学校ではのばらさんの方が影響力は強い。言い方はよくないですが、ぼつと出の若菜の言つた事なんて、誰も相手にしない。そう思つて、私はいつもどおり、堂々と学校で生活するようになりました。

もつとも、若菜はそんな事はしませんでした。私に話しかける事はなく、私の事を皆に話す事も無く、若菜は持ち前の明るさで、徐々にクラスに馴染み、一か月もたつ頃にはのばらさんに並ぶほど、クラスの中心的な人物になっていきました。しかし、のばらさんと若菜はあまり会話が無かつたようでした。前後の席なので、多少の挨拶程度はあつたようでしたが、クラスメイトとして和気あいあいと会話する姿は、私も見た事はありません。もしかすると、のばら

さんが私に気を使って話しかけていないのかとも思いましたが、のぼらさんは自分の意思で会話をしていないように感じました。

丁度、一学期が終わる頃でした。のぼらさんの取り巻きの数人が廊下で話し合っているのを、私は聞いてしまいました。「ぼつと出の庶民の編入生が、のぼらさんに近い位置にあるのはいい気分がしない」「このままでは、のぼらさん中心の規律が乱れてしまう」私は怖くなって、足早にその場を離れました。確かに、最近のクラスはのぼらさんが発言すると言うよりも、若菜が積極的に発言しているようでした。のぼらさんはもともと、自ら積極的に発言するというよりは、先生やクラスメイトに発言を促される形で意見を述べていたので、のぼらさんの立ち位置に、若菜が入りこんできたと思われるもおかしくない状況ではありました。そして高校一年の秋、事件は起きました。

私は「のぼら派」の数人に呼び出され、「今度のクラス役員選挙で、若菜に立候補させないようになりたい」と言われました。どうやら、若菜が委員長に立候補したいと言っていたのを、偶然聞いてしまったようなのです。学校は二期制を採用していて、学期が変わるごとにクラス委員も新しくなります。今までのクラスでしたら、クラス委員は絶対にのぼらさんか、のぼらさんが推薦した人という暗黙の了解がありましたから、他の誰かが委員長になるなんて、ありえない事でした。しかし、そんな暗黙の了解を脅かすほど、若菜は人気者になりつつあったのです。私は、のぼらさんに心を救われた身です。のぼらさんがいてくれたおかげで、過去の出



来事からも解放され、今を楽しく過ごしているのです。今度は私がのぼらさんに恩を返す時だと、そういう使命感を抱きました。私と数人の取り巻き達は、どうしたらのぼらさんの立場を侵さず、若菜に立候補させずに済むかを考えました。直接若菜に「立候補しないで欲しい」といつても、のぼら派の人間が画策したと思われるのは、のぼらさんの名前にキズを付けることになる。どうしたものか。私達は必死になって考えましたが、結局いい案は見つからず、その日はそのまま解散になりました。

転機は、その後すぐに訪れました。この学校では毎年十月に学園祭が行われ、私達のクラスも出し物をするのですが、一学期の後半から決まっていたのです。クラス委員選挙の前日に、予算を一人二千円、徴収することになっていました。徴収したお金は、一度教卓の引き出しの茶封筒に保管され、先生が放課後に全員分あるかどうかを確認してから、職員室に持っていく、という流れでした。しかし、放課後に先生が確認すると、茶封筒はなくなっていました。そしてそれは、若菜のバッグから発見されたのです。若菜は必死で盗んだことを否定しましたが、のぼら派の一人が発した、「これだから庶民は」という言葉が、クラス中に響き渡ったのです。その言葉を皮切りに、のぼら派のメンバーの不満が爆発しました。「どろぼう」「汚らわしい」「貧乏人」そういった誹謗中傷が彼女を襲いました。今まで若菜を慕っていた人達は、皆のぼら派の肩を持ち、若菜の弁解をする人はちっとも居なくなっていました。

結局、次の日に行われたクラス委員選挙では、満場一致で、のぼらさんが委員長になり、若菜はどの役職にも就くことができませんでした。会計を決める時に至っては、「昨日みたいなことにならないように頑張つてね」と先生が釘を刺す始末。堂々としているのぼらさんの前に、俯きながら小さく座る若菜はとても対照的で、いつの日かの私を連想させました。私はこの時、若菜を哀れだとは思いませんでした。なぜなら、私が若菜のバッグに封筒を忍び込ませたからです。クラス委員は信用が第一。なら、その信頼を少しでも落とせば、のぼらさんに軍配が上がる。そう考えていたところ、教卓に入っていた封筒の存在を思い出したのです。清掃の時間にこそり若菜のバッグに入れ、先生が教卓に封筒が無い事を確認すれば、大騒ぎになって持ち物検査が行われることはわかっていましたから、忍び込ませた後は静かに息を潜めるだけでした。それだけで、のぼらさんの顔が立てられる。そう思つて、私がやったことです。クラスの皆には、のぼらさんがやったことじゃないかという噂が立ってしまいましたが、そんな噂はすぐに消えました。のぼらさんにくら動機があつた（かもしれない）とはいへ、証拠もなく、教師からの信用もあつたことから、やはり若菜がやったという曲がった話だけが残りしました。

若菜の日常は大きく変わりました。机には醜い落書きがされ、ロッカーは荒らされ、休み時間になればクラス中から誹謗中傷を浴びせられる。まるで、過去の私をつくりでした。たった一日で、たった一つの事が原因で、独りぼっちになる。私は心の中で、あの日私を見捨てた若菜に復讐した様な気持ちになりました。

若菜へのいじめが徐々に暴力的になってきた、ある日のことです。朝、私とのぼらさんが教室に入ると、奥の方で若菜が五、六人に囲まれて、倒されて、足蹴にされていました。彼女たちの足の間から、若菜の傷ついた顔が見え、次の瞬間、若菜と目があつたのです。私はすかさず目を逸らし、のぼらさんと席に着きました。その後も、私は後ろから、若菜の視線を感じていましたが、私はその視線に応える気はなく、終始気がつかない振りをしていました。始業のベルが鳴ると皆席について、なにも無かつたかのようにふるまっています。若菜は制服を着崩したまま、ふらふらと席に向かって歩き出しました。そして、のぼらさんの前の、窓際のあの席に着いたのです。

いじめは、止まることは無く、止める人も無く、毎日続きました。しかし私は、若菜の瞳から、どこか強い意思を感じていました。それが何なのかは見当もつかないまま、あの日を迎えたのです。高校二年の、夏休みが終わった日でした。私とのぼらさんは、学校の近くで待ち合わせをして、一緒に学校へ向かいました。まだ夏の暑さがじりじりと残り、空には、真っ白にしか見えないくらいの日差しがあり、息をするのも億劫でした。汗が次から次に流れそうで、二人で影を探しながら歩いていました。学校の正門についた時です。時間を確認しようと校舎に付いた時計を見て、私は立ち止まりました。若菜が、屋上に一人、立っていたのです。いじめられていた人間が、屋上で何をしようとしているのか。すぐに察しがついて、気がつくとは私は、屋上への階段を駆け上がっていました。後ろから、のぼらさんの焦った声が聞こえてきたような気がし

ましたが、それを振りきって、私は急いだのです。

屋上に着くと、ペンチと、壊された細いチェーンが床に散乱していました。ドアは半開きになっていて、少し手を掛けると、風に押されて開きました。屋上には若菜はもう居らず、代わりに綺麗に揃えられた靴が残っていました。後から追いついてきたのばらさんが、震える手で私の肩に手を置いて、ゆっくりと、私をその場に座らせました。それと同時に、グラウンドから聞こえてくる甲高い悲鳴が、若菜の死を証明したのです。

その後の事は、あまり覚えていませんが、私は保健室で眠っていたようでした。時間は既にお昼を過ぎていて、気だるさが私の体に残っていました。保健医は目覚めた私に気がつく、「気分は悪くないか」とか、「痛い所はないか」どうかを聞いてきました。私は素直に、「ありません」と答えると、「今から担任の先生を呼んでくるから、少し待っていて」と言われ、保健室には、私一人になりました。

担任の先生には、「若菜が屋上にいたのを見つけて、私も慌てて屋上に向かった」とだけ言いました。先生もそれに満足したのか、今日は帰ってゆっくり休むようにと私に告げ、保健室から出て行きました。

次の日学校へ行くと、若菜の机は綺麗なものになっていて、その上には、花瓶が置いてあり、花がいけられています。彼女は、本当に亡くなったのです。昨日の事がまるで夢の世界、テレビの世界の出来ごとのようでした。教室にいる皆はひそひそと、若菜が死んだ理由を噂して

いて、チャイムが鳴るまで、クラスのざわめきは収まりませんでした。のばらさんは私を心配してくれて、あまり無理はしないようにと声をかけてくれましたが、それを笑顔で受け止める余裕はありませんでした。

S H R が終わり、一時間目の授業が始まった時です。私の机の中に、教科書以外に、何か封筒のようなものが入っているのに気がつきました。昨日の配布物かと思い、机から出してみると、直筆で、『遺書』と書かれてありました。間違いなく、若菜の書いたものだと確信しました。その日は一日中頭の中が真っ白で、手の震えが止まりませんでした。なぜ私の机に若菜の遺書が誰かに入れられたのか。今度は私が、生贄になるのか。そう思って、その日は早退し、封筒も家に持ち帰りました。

遺書にはなんて書いてあるんだろう。私やのばらさんの事が書かれてあったらどうしよう。私はそう思って、部屋に鍵を掛けた後、糊づけされていない封筒を開きました。

そこには、私が予想していなかった事が書かれていました。ただ一言、「やっとなつぼみの気持ちがあった。ごめんね。」とだけ。

私は若菜を誤解していたのです。彼女に、悪意なんて無かった。なのに、私は。いじめられる気持ちは知っていたはずなのに。いじめるつもりなんて無かったくせに、親友だった人間を私は一人、死なせてしまいました。

私は心の中で、クラスのいじめが発覚する事を祈っていました。しかし、私には手をあげる勇気なんて、これっぽっちも無かったのです。のぼらさんに嫌われたくない。皆に嫌われたくない。その一心で、私はこの半年間を過ごしていました。でも、臉を閉じれば見えるのです。あの夏の光景が。白い日差しの中、屋上でただ一人立ちつくすあの姿が。それは月日が経てば経つほど鮮明になって、あの時若菜は、私を見ていたのかもという妄想まで私を襲いました。私は親友を嵌めた。私は彼女がいじめられるのを見ていた。半年間毎日。毎日。毎日。

勇気の無い私は、自分の口からこの事実を誰かに語ることはできませんでした。なのでせめて、この遺書に、私の思いを託します。私の身勝手をお許しください。私の愚行を許さないでください。そして、出来るのならば、私はあの日に、戻りたい。

○年○月○日 篠原つばみ

「私の親友がこの世を去って、もう何十回目の夏でしょう。私は彼女に託された遺書を、世間に公開することなく、未だ手元に残してしまっている。彼女の人生の全て。彼女の思い全てが込められた手紙。私の青春は、私の時間は、あの夏に、全て置いてきてしまいました。」

島田さんのバッグから、クラスのお金が見つかった前の日。私は島田さんに会っていました。偶然、街の通りで会い、しばらく人気のない公園で、二人で話をしました。私は島田さんに詰

めよりました。どれだけ彼女が苦しい思いをしていたのか。親友であったなら、どうして手を差し伸べ無かったのか。なぜ今になって彼女の前に現れたのか。島田さんは公園のベンチに座ると、彼女、篠原つぼみさんの過去について話してくれました。今でも後悔していると。今度こそ彼女の力になりたかったと。昔から口下手な彼女の手助けがしたかった。そう言いました。ですから、その時の私は島田さんを信じ、クラス委員選挙では島田さんを推薦しようと考えたのです。しかしそれは、叶いませんでした。爆発的に広がった島田さんへの中傷はエスカレーターし、いつの間にか、誰にも止める事が出来ない域にまで達してしまいました。まるで奴隷の様に虐げられていた島田さんを、私はどんな目で見つめていたのでしょうか。

娘に、『お母さんはどんな学生だったの』と聞かれるたび、胸が張り裂けそうになります。手紙は、あの日の翌日、学校の私の机から発見されました。彼女が、島田さんの遺書を見つけた時と、まったく同じ状況だったと思います。彼女に勇気が無かったのだとしたら、きっと私にも無いのでしょうか。でもきつと、彼女にはありました。己の命と引き換えに、真実を語るうとしたのだから。そしてその真実は、今、私のこの手で、この世に産声を上げるのです。あの時の私に出来なかつた事を、私の今までの人生をかけて。」

二〇一八年、平成最後の夏に、とある本が発売された。二十三年前、有名女子高で起きた、二人の自殺についての本だ。上記の文章は、そのあとがきの冒頭である。一人目は屋上から飛び降り、もう一人は大量の睡眠薬を飲んで亡くなった。当時、最初の自殺者、島田若菜の両親は、

いじめが原因の自殺ではないかと学校に抗議したが、アンケートを実施するだけの対応に終わり、遺族の無念は晴らされなかった。その半年後に同じく自殺した篠原つぼみの死の理由も謎のままに終わり、結局何が理由で若い命が砕け散ったのか、その理由を知るものはこの世には居なくなつた。はずであつた。

高崎のばら氏は、言わずと知れた有名企業の代表である。祖父の会社を引き継ぎ、女手一つで会社の経営を行つてきた。良きパートナーに恵まれ、今では夫と娘と家族三人で幸せに暮らしている。そんな彼女は、あの女子高の生徒だつたのである。彼女は自身のブログでこう語つていた。「これから私がすることは、勇気でも、正義感からでもない。今まで隠してしまつていた罪を、告白する為のものです」と。当然、その時の筆者は、一体何の事だかわからずだったが、今なら、彼女の気持ちがかかるかもしれない。彼女自身はいじめに関与していなかつたかもしれないが、いじめは決して、見過ごされていいはずが無いからである。黙認していた彼女もきつと、同罪なのだ。しかし、筆者はこうも考える。「自分ならどうしていたのだろうか」と。目の前に酷いいじめがあつたとして、自分は止められるか。「その子の代わりに標的になるかもしれない」という恐怖心に勝てただろうか。「やめなよ」の一言が言えただろうか。

今こそ、全ての人々に聞きたい。決して屈することなくいじめに立ち向かえるか。恐怖に一人立ち向かえるか。「死」という逃げ道を消すことができるか。この本は、その答えを探すきっかけになるかもしれない。



ライター：○○○○○ 最終更新日2018.8.23 15:43  
引用元 『窓際のシュードラ』 著 高崎のぼら

終

運天 香緒(うんてん かおり) / 沖縄国際大学・総合文化学部日本文化学科三年





# 詩 部 門

詩部門受賞作

共謀という穴へ捧げる五の詩篇

酢橘 とおる

その一

わからない

という抒情

「わからない」と言いきった

作家へなお残る抒情

戦場の抒情

傷つき果てた荒野に

なお残る未亡人への抒情

風景の抒情

季節という

巡りつづける風物の抒情

花瓶の抒情

水も花も点さず

手放しにされて散らばった

献花の抒情

その二

ばらばらなまま

束ねなおそうと謀る

ほっそりとした一本の感情が

リボンのように

魚のようにしなるのだ

その三

抒情という絞首台の

縄の穴

沢山の叫びをいっぺんに宙吊りにさせる

静けさという音の  
重力のような抒情  
抒情のなか浮かび上がる 魂たち 亡霊たち  
名前がわからない 動物たち 魚たち  
頭のない 蠢き 孕み  
鮮やかな にく さかな

その四

離ればなれになった  
行方不明のさかなの頭にも  
目玉の穴やくちびるがあつて  
あらゆる食卓へ向けて  
ぎよろぎよろ息を吹きかけている  
あぶくのような  
どっさりの明日  
水槽のポンプのうねり  
空腹のふくらみ

くちなしのふくらみ  
ふくらみをはかる

巻き尺

そのメモリを

縫うように 取り巻くように

生き別れたさかなたちは

どっさり泳ぐ

### その五

愛する者を 花束を

墓穴へ放る前だった

潤んだ喉や魚の 二、三本を

縄の穴で締める最中だった

共食いするようにむさぼった

大恋愛や逃避行や未練の心中のはてに

まことに涼しい砂漠があつて

みなひとが沈む柔らかい砂原に



共謀という穴は 待っている  
眼を広げて 口を開いて  
じっと待っているのだ  
まことに涼しい風が吹くのを

酔橘 とおる (すだち とおる) / 琉球大学・法文学部国際言語文化学科三年



## 詩部門佳作

# Plastic romance

かねしろ 茉衣

境界線すれすれの綱渡り

下品なネオンと夜の帳の中

お腹に磔イエス様

ピンクのベッドで横たわり

「ノー」と迎え撃つので大忙し

気休め程度のしけた隔たり

飽きることなく繰り返される

擬似的子作りはどうせ独り善がり

早撃ちガンマンとおもちゃの兵隊

コウノトリを撃ち墮とせと

躍起になってもう三年  
四六時中こちらを見張ってき

一触即発の粗探し

手垢に塗れてもう三年

鼻筋ひとつあたし五回分

二重も追加でくださいな

消費期限と戦いながら

今日も鏡とにらめっこ

映る醜女は一体だあれ

かねしろ 茉衣（かねしろ まい）／沖縄国際大学・総合文化学部英米言語文化学科四年

詩部門佳作

# 喜劇行

荒井 青

蚊を食う為にいる蜻蛉は

現代的な都市の傍らで

西日に炙られ

鳥に狙われ

四枚の羽根を共鳴させ合い飛んでいる

蝉の抜け殻と落ち葉は同じ色

若い大人だけが青なのだと

ならばわたしはなんなのだと

蜻蛉を掻き分け

落ち葉を踏みしめ

蝉の抜け殻を横目に見て

車両通行止めの路地から始まる  
ジプシーの行進は続いていく  
銃は危ないからもてない  
脳は断片化された路線図  
人と人との繋がりは情動的な軛  
だからペンを持つて紙を持つて群における相対的な位置を示して  
それらしく歌いながらジプシーは歩く  
善なるものは、かなしい  
そんな言葉が陳腐になつたから  
ジプシーの行進は続いていく

荒井 青（あらい せい）／琉球大学・教育学部生涯教育課程四年

詩部門佳作

人の檻

豊見山 尚樹

東の空に日が昇る頃

今は七〇・四パーセントの巣から

鉄と油で固められた鷹や鵞が鳴いては

住宅地に岩をくわえて落としていく

猿もしばしば檻から抜け出しては

人のすべてを奪っていく

金も命も何もかも

臆病な飼育員はただ見ているだけの

名ばかりの躰と放し飼い

みな飼育員に訴えた  
管理できないならここを閉めろと  
猿と人との違いもわからぬ  
痛みも知らぬ愚かな飼育員は  
俺たちを檻で困ったのだ

最初はみな抵抗していた  
人として扱え  
元の生活を返せと  
だがそれに比例して  
監視の目を強くする犬  
時の経過も恐ろしく  
檻の中で過ごすうちに  
世代も変わり  
新しい世代の多くは何も知らず  
檻の中にさらに檻を作り  
私を見て私を見てと



はしゃいでは快楽に溺れる  
まるで猿のように

あれから

切り取られるようになった

何もかも

歴史の年表も

言語も

主権も

知性も

戦の痛みも

元からなかったんだと頭でつかちの若い連中は信じている

だがちがう

俺は知っている

身に沁みて

この声が聞こえるシンカヌチャーよ

諦めるな

俺は鼓動を刻み

火を点しつづける

檻を壊すその日まで

豊見山 尚樹（とみやま なおき）／沖繩国際大学・経済学部経済学科四年

## 詩部門佳作

# 卵割

古波藏  
唯

飛行機の音が私の脳を揺らす

頭の中が掻き混ぜられて後に来る沈黙

私は迷っている

はつきりしない思考が太陽を何色に見せるか

赤か黄色か白か どうしようもなく白だ

だがそれは全て虚偽である

私は本当の色を知らない

故に己で決めねばならない

私に見える風景は他の誰にも見えないのだ

恥じることはない それが前進するためならば

飛行機の音が近付いてくる

迷いは晴れない

他人のために犠牲となれるか

犠牲なんてごめんだ 誰だって自分が愛しい

だが成功だけが結果じゃないだろう

勝者を見上げた景色はどうだ

胸の奥底を熱く燃やせ

私が犠牲となっても生還を諦めてはいないのだ

悔いることはない 高みを目指す糧とするならば

飛行機が頭上を過ぎていく

迷うのは当然だ

己の中に沈む叫びを殺さずにいられるか

何のための沈黙だ そこからは何も生まれない

だが確かに知っているのだ

私の叫びが刃物であることを

自他を問わず傷つけることを

傷つけることに血を伴うか否かは関係のないことだ

怖じることはない 分かり合うためならば

私が見たものを疑うな

失敗が死だと諦めるな

自分を他人に合わせるな

誇れ自分の在り方を

私が如何に生まれ如何に歩むかを

自身がその目で確かめるまでは迷え

迷い傷つき傷つけなければ

生まれることすら許されない

飛行機が一直線に白を伸ばしたまま

遠くの雨雲へと消えた



詩部門佳作

# 永久不滅の麻薬

秋雨 一也

仕事も無いのに朝早く目を覚ました休日

時計を見て二度寝を決めようと思ったけど、何故かその気になれない

そんな時にはシロップだなと思い、なんとも言えない温さを惜しみつつ、ベッドから抜け出した

トテトテ、トテトテと何処か心許ない足音を立てて、シロップのある台所へと続く廊下が長いと思いながら歩く

長く感じられた短い廊下を通り抜け、宝探しの気持ちで台所を漁る

だが、長針が二度も天盤の頂点と巡り会っているのに、未だにシロツブの面影にすら会えない

ふと、その時に前回の休日でシロツブが尽きたことを思い出した

絶望した

今まで色鮮やかだった周りの色が、汚い黄ばんだ灰色に支配された

なんとも言い難い強い圧迫感と胸苦しさを感じる

その事から逃げ出したい気持ちの余り、頭を何度も何度も調理スペースに打ち付けた

すると、何かが上から落ちてきた

その事に気を取られ、落ちてきたものを見た



ステイックシュガーのような袋が数本床に散乱していた

額の痛みを忘れて、抗いきれないオーラを放つそれを拾い上げ、書かれている文字をみた

快樂・喜び・食欲・睡眠欲・満足感等とそこにはあった

脳を焼き焦がすほどの電流が躰を駆け巡った

そうだよ、無ければ自分で作れば良い

そして掻き集め、誰も逃れることの出来ない永久不滅の麻薬たちを水に溶かし煮詰める

煮詰めている水の色が虹の外側から内側の色へと変わりきり、火を止めて粗熱をとる

そしてようやく出来上り、瑠璃色となったシロップを一口舐めた

これだという思いに浸りながら、目の端で一つのフワフワと 浮かぶ金魚鉢を捉え、気まぐれで日課の餌やりと一緒に地球と名付けたその金魚鉢に流した

シロップがオーロラのカーテンのように広がる様を見届け、そのまま二度寝をしに寝室へ戻り、ベッドと一体になった

秋雨 一也（あきさめ かずや）／沖縄国際大学・産業情報学部企業システム学科三年

## 詩部門佳作

# 歩く

玉城 琉舞

えーいやーまーんかい歩(あ)つちよーが

歩(あ)つちよーがんでい、わんねーなま歩(あ)つちえーねーらんしが

いいーあらんさ、まーぬ学校歩(あ)つちよーが

学校歩(あ)つちよーがんでいしえー何(ぬー)やが

はっさ、いやー学問(しみなれー)するとうくろーよ、名(な)ー何(ぬー)やが

わーがいちゆる学校な、うぬくとうちちよーたんな

学校いちゅんでいーしえー、歩(あ)つちゅんでい言ゆんな

やんどー、うびーとーけー

学校歩(あ)つちよんどー、

上等やさ、わったーや山学校やたんどー

おー昔(んかし)えー山んかいあたんな

玉城 琉舞 (たましろ りゆうぶ) / 沖縄国際大学・総合文化学部日本文化学科四年



# 選 評

## 選評【小説部門】

### 〔びぶりお文学賞選評〕

西森 和広

応募順に各作品へのコメントを記す。評者は少々保守的な「読者」であり、以下の論評も一つの見方と想ってもらえればよい。必ずしもすべてそうでなければならぬというものではない、一人の読者の注文なのである。

「贖罪」は、語り手のモノローグに始まるが、やがて三人称の語りに変わり、「カズト」という男性と「明美」という女性の関係を中心に描く。最初のモノローグの語り手と「カズト」は同じ人物のようだ。怪しげな彼の生活、殺人、明美の父の過去などが綴られてゆく。モノローグの部分は概ねハードボイルド・タッチの文体になっているが、人物間の絡み、会話の場面では、劇画か漫画といった調子に変わる。若者たちの日常的でかなりルーズな会話のためもあるが、多用される擬声語がカッコ書きされ、人物の発話と区別しにくいスタイルで書かれているのも原因の一つだろう。最初は誰かの発声した音かと思った。漫画の吹き出しなら、絵が説明してくれるが、文章では「グラスの中で氷がカランと音を立てた（あくまで一例）のように書かないと分からない。「カラン」と書いている箇所、他にこの「〜」を二つ重ねているような箇所もあるが、特に後者は感心しない。だがそもそも常套的な擬声語は陳腐な感を与える。鍋は「コトコト」、ドアは「バ

タン」で本当によいか。実際そうだとしても、わざわざその音声を書く必要はあるのか。例えば、「激しくドアの閉まる音がした」、これで十分読み手の耳にその音は響くのではないか。

「九月二十七日の決意」は、弟の死と失われた家族の絆、その中で生きることの虚無感の中にある少女が、「はっとおじさん」という人物との交流を通して人間信頼の回復へと至る道筋が描かれる物語と言えるだろう。幾つか疑問の点を挙げると、弟のモノローグ、弟との対話などはすべて彼女の夢想の中の表現だとすると、その間に挿入された「はっとおじさん」の挿話はいったい現実なのだろうか。現実であるならば、彼女はどこからどこまでの間、夢想状態（昏睡状態か）の中にいたのか。はっとおじさんの挿話自体も夢想の中の想起だとすれば、実際この人は本当に存在するのか、などと色々考えてしまう。また目覚めた直後の主人公のモノローグ「二人の私のお母さんが、揃っている」とは、実の母と継母の二人が眼前にいるという現実なのか、あるいはこれもやはりまだ夢想の一部なのか。そして、これは少々些末な点だが、やっ意識を取り戻した子供の患者の前で両親を叱責する医師がいるものだろうか。患者のトラウマになりかねないし、例え明確に両親に責任があると考えられる場合でも、それは患者を初めて診たときか治療の過程の中で、他の人のいない場所を選んで行うのではないか。両親や家族間での責任のなすり合いならあるだろう。弟の死の際にそれがあつたことは推測される。

『窓際のシュードラ』は、いきなり遺書で始まり、贖罪の念が綴られる。複雑なのは、自身いじめの被害者であつた過去を持ちながら、彼女を助けたいと思つていた幼なじみの同級生を結果としていじめの対象にさせ、死に至らしたということを悔いて自らも命を絶つたという内容だ。



そこに作品構成の複雑さが加わる。この遺書を本の形で公刊したのが、実は二人の死の原因となつたとも言える別の同級生で、彼女も長い年月、この遺書を手元に置き、苦しんできた。それではこの物語の語り手はその人物なのかといえはそうではなく、以上はすべてこの本についてのインターネット上での紹介文であり、最後は名前を記されないその紹介者のコメントによって締めくくられる。実に今風の道具立てにマトリョーシカのごとき入れ子式構造が組み合わさっていて感心する。ただ小説として読ませるには、例えば、遺書の公開に踏み切った女性の内面に切り込むような物語がほしい。

「贈り物」の目指したのが（大人のための）メルヘンで、読みやすさを第一に考えたのだとしても、一文で一段落はよろしくない。まさかこのようにしか書けないのではないだろうが、散文の物語、小説を目指すのなら、文章作法の常道は無視しないほうがよい。がんばって考えたであらうと思うが、メルヘンは決して易しくはないというのが分かる。そして多くは優しくもない、それをどう楽しく読ませるか。

「井の中の」は、自分は人と違うという優越意識から、次々と女性を殺害する男の末路を描く。不動産屋で働く主人公は、客である被害女性の態度を無礼と批判をするが、当の自分はコーヒー片手に接客をするような人物である。ところが軽蔑していた同僚が逮捕され、彼とそっくり同じような事件を起こしていた犯人だと知って愕然とする。彼も結局逮捕され、最後に二人の自己釈明の言葉で終わるが、それらはほぼ同じ言葉の繰り返しだ。そういえば被害者の女性たちの反応や言動も皆そっくりで、コピーしたように同じ言葉が発せられる箇所もあり、リアルな犯罪小説

として見ると不自然だ。人間不信・憎悪の寓話と見れば領けなくもない。いずれにせよ、三人称の語りというスタイルを取っている以上、語り手と主人公の思考・意思は峻別しておかないとまずい。両者が混じり合つて区別がつかないような箇所が多々見られる。

「フヘンのあなたへ」は、ある男子学生と、「革命」的な活動の結果逮捕される奇矯な言動の女子学生との交流の物語。背景になる学生たちの日常はそれほど困難を感じずに書けたかもしれないが、本作は件の女子学生の魅力を描けてこそその作品であろう。彼女に魅力を感じていなかったなら、語り手である男子学生も彼女とのことを何とも思わなかっただろうし、その後の事件から特別な感慨を催すこともなかったろう。奇矯さを持ちながら人を惹き付ける魅力、そう簡単には書けないだろう。苦勞がにじみ出ているのを感じる。そもそも人物の魅力を描きあげること自体が難しい。

「戻れない僕ら」は、友人の県外就職にショックを受けた大学生の主人公の心の葛藤が語られる作品。やはり作者に身近な、昨年度の受賞作と似たところのあるテーマだが、短く日記のようなままで終わっている。ただこの学生の感慨はある意味新鮮な驚きとも言える。「沖繩を出て行く」ということが今なお重要なテーマになり得るかどうか。その切実さを伝えるにはもう少し道具立てが必要だろう。

以上、各作品について述べさせていただいた。皆さんの努力と苦心の跡がどれからも伝わってきて、本当にご苦勞様と言いたい。自分は保守的な方なのであまり強く言うつもりはないが、少し意識してほしい点を述べて終わろう。まず、物語の「語り」という視点から常に気になってい

るのが、「語り手」は誰かという点をしっかりと意識してほしいということだ。時に見受けられて残念なのは、三人称の語りで、主人公と語り手の考えが重なり合って区別がつかなくなる場合。ひいては作者その人の思想も問われる重要な問題でもある。また語り手が容易に移り変わる例もあるが、これも十分意識していないと読者を混乱させる。「語り手」と「作者」、「語り手」と「主人公・登場人物」の間の関係を自分の中でしっかりと整理しておく必要がある。もちろん「語り手」の存在しない（意識させない）文体もあるが、そうであれば一層、客体化に意を用いてほしい。

以下は技術的な側面だが、日本語の正書法からはずれるような符号・記号を安易に使うのは気をつけた方がよい。許容範囲ながら、私自身は「？」や「！」を使うのにも少し抵抗がある。「おい」といった波線の使用、さらにはこの「ゝ」を二つ重ねているような例も目につくが、特に後者は感心しない。波線は正書法上の符号としてはまだ認められていない記号であろう。もちろん、作家には大幅な自由がある。この程度は許容範囲とも言えるが、ただ十分意識して使ってもらいたい。むしろ波線で表したい音色のニュアンスを文の力で伝える努力、言葉による表現を探す努力をまずはしてほしい。また分かっていると思うが、ワープロの横書きから縦書きへの変換の際には色々和不都合の生じる場合があるので、よく見直した方がよい。数字については、漢数字とアラビア（算用）数字の使い分けも注意を要する。縦書きでは多くの場合、漢数字の方がしっくりする。特に「ひとつ、ふたつ」を「1つ、2つ」と書かれるのはひどく違和感がある。この使い分けにはこれという明確な基準がなく、かなり立派な内容の文章でもこの点に関しては少々の加減な例が見受けられる。使い分けについては、意識して自分自身の中で明確な基準を持つ

必要がある。

(にしもり かずひろ／国際地域創造学部教授)

## 第十二回びぶりお文学賞選評

規定枚数を意識した多彩なテーマの作品を求めたい

武藤 清吾

今回は応募作自体が少なく、しかも原稿の文字数も規定（三〇字×四〇行×二〇枚）の半分程度のもので散見された。応募にあたっては、締切直前の執筆で推敲のないままの作品とならないように心がけてほしい。また、文字数も規定いっぱいになるようにして豊かな物語世界をつくりあげてほしい。

こうした応募状況もあり入選は出せなかった。「九月二十七日の決意」「窓際のシールドラ」を佳作に選んだ。二作とも文字数が半分程度であり、描かれた世界が狭小なものになったことは否めない。

「九月二十七日の決意」は、作者の筆力を感じさせる作品である。応募にあたり枚数規定を誤解していたのか、短い枚数で作品が完結している。それだけに規定どおりであれば、より充実した作品となった可能性がある。

母親が運転していた車で弟が事故死する。それが原因で母親が精神科に入院し、両親は離婚した。長女の「わたし」は、弟を失ったかなしみと家族を喪ったさみしさを背負う。その様子を亡くなった弟が見つめるという物語になっている。状況も比較的よく書けており、どこか家族にも起りうる世界を描いていて説得力もある。

「わたし」は、父親の車を洗う洗車場で、過去にプロレスラーとして活躍した男性と知り合いになり、彼を「はっとおじさん」と呼んでいた。彼も、「わたし」と同じようにさみしさを抱えていた。病院通いをしながら年金生活を送り、過去にしがみつく姿に妻もあきれている。彼は、「わたし」がお小遣い稼ぎとはいえ働いてお金をもらっているのをほめる。そのときの彼の言葉には気づかされることが多く、それが彼女の生きる勇気となっていた。「わたし」と「はっとおじさん」との関わりはおおよそこの程度で終わっている。「はっとおじさん」の「わたし」への眼差しや「わたし」の彼への思いを細やかに描写すればよりよい作品に仕上がった。

『窓際のシュードラ』はいじめをめぐる遺書を作品の骨格に据えている。物語は、小学校時代にいじめにあつた篠原つぼみとそれを助けてくれた級友の島田若菜を軸に展開する。遺書は篠原つぼみのものである。遺書の前半では、つぼみがいじめにあつて苦しんでいるのを若菜が助けてくれたこと、若菜が突然心変わりをしてつぼみを無視するようになったことが回想される。この場面はテンポ良く描かれていて読みやすい。

遺書の後半は、つぼみは両親の決断で桜庭女子高校付属中学校に転校し、高校に内部進学した場面から始まる。つぼみは付属中学時代にお金持ちの「お嬢様」グループの中心にいた高崎のぼらと友人になり、これまでのように人間関係に悩むことがなくなっていく様子が語られている。その高校に若菜が編入してきた。つぼみは過去のいじめを知る若菜の存在が気掛かりになる。

高一の秋、若菜がクラス役員選挙に立候補するうわさが流れ、若菜へのいじめが始まる。つぼみも若菜のバッグにクラスのお金が入った封筒を忍ばせることで、そのいじめに加担した。高二の

夏休み明けに若菜は飛び降り自殺をする。つぼみの机に若菜の遺書が入っていた。そこには若菜の本当の気持ちを書かれており、つぼみは若菜を誤解していたことを知る。

物語の最後に、高崎のぼら著『窓際のシールドラ』の一節が紹介される。そこには、のぼらがつぼみの苦しみを若菜に訴えていたこと、自分自身はいじめには無関係であったことを語りながら、いじめをなくすことが大切であり、彼女たちの真実を告発すると書かれていた。

しかし、ここまでを読んできた者には、のぼらの真意がどこにあるのかはわかりにくい。彼女の欺瞞的な姿勢と言いつくであるのか、本当にいじめをなくしたいと思っていながら何もできずにいたのかについては不明のままなのである。作者は、のぼらの言説の真偽やその解釈も含めて読み手に委ねているようにも見受けられる。いじめに関する言葉が重ねられていってもその真実は見えてこない。重要なのは当事者の勇気だ。いじめの核心を突こうとして、つぼみの遺書とのぼらの著書の一節を公開して、そこにコメントを寄せたのは、ライター（名前は「○○○○」と略されている）であることが最後にわかる仕掛けになっている。

この作品も枚数規定の半分程度で終わっている。いじめについては多くを描くが、少女たちの普段の学校生活やそこでの喜怒哀楽にさらに描写を使うこと、両親がアンケートを求めたときの学校や教師たちの対応など、さらに総合的に描いていけば、より重層的な作品に仕上がった。

これ以外の作品も簡単に見ておきたい。

「贖罪」は、率直に言って描かれている世界が読み取りにくい。家族構成員の葛藤が表現されているものの、人物関係の整理が不足している。まずは、物語の構成をしっかりと組み立てて、そ

れぞれの人物に担わせる役割を明確にすることから始めてほしい。

「贈り物」は、冒頭部に描かれた時計屋の仕事が説明的である。人物を増やして時計屋との関わりで出来事をつくり出しながら仕事を説明していくと物語になる。その後の客とのやり取りもさらに複雑に展開させられるとよい。最後の場面も時計屋と客とのやり取りをほぼすべて会話で処理している。これも出来事をつくり出す努力がほしい。

「井の中の」は、不動産屋に勤める男たちが次々と殺人を犯していく状況はそれなりに読むことができる。しかし、殺人犯を特定していく最後の場面がやや安易である。意外な結末で終わるはずが、逆に平凡な印象を与えている。犯行に至る布石も平板なため、描かれた世界に奥行きが不足している。より練った物語世界を描き出す努力を求めたい。

「フヘンのあなたへ」は人物の発する言葉の意味がつかみにくい。「つまらない男代表の金城君」「キ印代表の串刺し嬢さん」などの表現からは人物がイメージしづらく、描かれている状況もわかりにくい。また、会話表現が多く、作品世界を単調にしている。まずは、会話の整理や人物を描き出す工夫を試みよう。

「戻れない僕ら」は、応募作のなかでさらに執筆枚数が少なく、その分描かれる世界も狭い。題名にあるようにこれまでの人生を回想した作品である。しかし、なぜ回想するのかが問われることなく描かれており、読み進めていくうちに、まずはその意味を問うことから物語は始まるのではないかと思えてくる。

今回は全体として日常生活に題材を求めるものが多かった。沖縄で学ぶ若者らしく沖縄の自然



や生態、戦争体験や平和、他民族との交流、琉球王国の歴史や伝統、地域で生きる人々の生活や文化など、より多彩なテーマの作品を求めたい。

最後に全体として誤字脱字が多すぎる。推敲しないまま、あるいは推敲不十分のまま応募することは、自らの作品への誇りに傷をつけていることではないか。そういう自覚をもつて応募に真摯に向き合ってほしい。

(むとう せいご／教育学部教授)

## 第十二回びぶりお文学賞選評

村上 陽子

今年度から小説部門の選考委員を務めることとなり、現役学生の小説を読めるのを楽しみにしていた。しかし応募作品が七編と少数であったこと、また、応募作品のうち半数程度が二万四千字という規定をかなり下回る枚数の作品であったことを残念に感じている。受賞該当作なしという結果は、その残念さが私一人のものではなく、各選考委員に共通していたことをあらわしているだろう。

しかし応募作の中には、作者の今後の成長が期待できる作品もみられた。特に、佳作に選ばれた二作品には、いずれもテーマのおもしろみや文章の冴えを感じられた。

「九月二十七日の決意」では、小学五年生の少女と、弟の死をきっかけに壊れてしまった家族とが描かれる。弟は死者であるにもかかわらず、主人公の少女に影のように寄り添うかたちで物語を語り起こしている。そのため、読者は結末近くに至るまで弟が死者であることに気づかない仕掛けとなっている。少女は成長した姿の弟を妄想の中で作り上げ、弟を通して自分自身を客観的に見つめながら、学校や家族になじめないままに日々を送っている。また、少女は近所に住む少し変わったおじさんとも親交を深めていくのだが、それも彼女が自分自身の人生を歩むためのゆっくりとした回復の一助となっていることがわかる。

設定には凝ったところもあり、傷付いた少女の回復というテーマもおもしろい。しかし惜しま

れる点もいくつかある。一つ目は、弟の死から物語が書き起こされるまでに五年という長い時間が経過しているという設定だ。弟が死んだのは三歳、そのとき五、六歳だった少女が小学五年生になるまでにはさまざまな葛藤や問題があったはずである。しかし本作ではその部分が描かれず、妄想の中で成長した小学二年生の弟が唐突に登場してしまう。これが作品のリアリティを削ぎ、わかりにくさを生む原因になっている。弟の死をより近い過去に設定してもよかったのではないだろうか。二つ目は、少女が入院して以降の描写が説明的で性急になってしまっている点である。少女以外の家族がそれぞれに背負っていたはずの苦しみや、おじさんが少女との交流に何を求めていたのかなど、掘り下げられる箇所はまだ十分にあっただはずだ。ここにはやはり、一万字程度と規定枚数の半分程度で作品をまとめたことの影響がある。より長く、深みのある作品の執筆にチャレンジしてもらいたい。

『窓際のシュードラ』は、スクールカーストといじめを扱った一編である。小学生の頃はいじめから逃れるため、中高一貫の名門女子校に進学した主人公つぼみは、学校で強い影響力を持つつぼらと親しくなり、「のぼらさんの友人」として居場所を獲得していく。しかし、かつての同級生であり、自分がいじめられていた過去を知っている若菜が高校から編入してきたため、つぼみは若菜を陥れるように動いてしまう。あつという間にいじめの標的となつた若菜は、ある日校舎の屋上から身を躍らせ、つぼみも遺書を遺してその生を閉じてしまうのである。

本作品の大部分を示すのは、カーストの下位に戻りたくないという思いに突き動かされて行動してしまつた結果、取り返しのつかない結果を招いてしまつたつぼみの遺書である。この部分は

丹念に描かれており、作者の力量を示すものとなっている。

しかし、二人の自殺を止められなかったのばらが二十三年後に手記を書いて事の顛末を世に知らしめるという後日談がつき、さらにそのような手記を発表したのばらの著書『窓際のシュードドラ』を評するライターの「筆者」の視点でいじめにどう対応するべきかという問いが投げかけられる結末部には不満が残る。いじめの渦中であって書かれた少女の遺書と、二十三年という時を経て当時の出来事を捉え返す大人ののばらの視点の違いはより丁寧に描かれる必要があっただろう。

また、それが現在を生きる人々にどう受け止められるのかという問いについても、たとえば母の手記を読んだのばらの娘の視点などを入れて膨らませることが可能だったのではないだろうか。

『窓際のシュードドラ』も、一万三千字程度の作品であった。こういった問題を掘り下げていくために十分な字数が残されているのだから、ぜひ活用してもらいたかった。以上、佳作を受賞した二名の今後の活躍を心より期待したい。

選外となった作品のなかで、もっともおもしろく読めたのは「井の中の」である。本作は同じ不動産屋に勤める二人の男がそれぞれ連続殺人を犯しているというミステリーである。母の自殺で精神のバランスを崩し、仕事をこなすかたわら定期的に殺人を犯すという主人公の山路についてはよく描けていると言える。しかし、人当たりもよく、社長にも気に入られている森口が殺人に手を染めていた動機は不明瞭である。正反対に見えていた二人の間に思わぬ相同性があるという意外性を生かすためにも、森口についてももう少し詳細に描く必要があった。

とはいえ、短編では扱いにくいミステリーをこの枚数でまとめ上げた力量は評価できる。規定

枚数に応じたプロットを構想するか、もしくははより壮大な作品を書き上げることにチャレンジするか。次作への期待が持てる。

「贖罪」は心に深い傷を負いながら夜の街で幅を利かせる若い男カズトと、その愛人の明美の物語である。二人は寄り添いあいながらかつての加害者に贖罪を求めることで傷を癒やそうと奮闘するが、エピソードの一つ一つの掘り下げが浅く、全体的にわかりにくい作品となってしまうことが惜しまれる。また、カズトが「億り人」と呼ばれる意味などにもしつかりと言及してほしかった。

「贈り物」は、若い時計職人と身体の弱いお嬢様の淡い恋を描いたメルヘンである。特に悪いところがあるわけではないが、設定も展開もありきたりで、独自性に乏しい。村の歴史性や親世代のエピソードなど、より緻密に設定を作り込んでいくと描写に厚みが出てくるのではないだろうか。

「フヘンのあなたへ」は、キャラを作り込んだ女子学生とごく普通の男子学生が、キャンパスの一角でしばし対話するという短編である。キャラ設定や台詞には工夫が見られるが、全体として何を書きたいのかが定まっていな印象があり、インパクトが弱い。また、後半で唐突に女子学生が新興宗教のトップとしてテロを企てていたことが明かされるものの、前半の会話にその気配が薄いこともあって結末が納得しにくい。よりテーマを絞り込んで深めていくことが望まれる。

「戻れない僕ら」では、大学卒業・就職を控えた二人の男のやりとりが描かれる。主人公は沖繩で公務員になることを選び、友人は彼女と別れて東京に働きに出ることを決める。ここが人生

の選択の決定的な分かれ道になると痛切に感じている二人の姿は、現役大学生の作者であればこそ書けたものかもしれない。しかし、現実には分かれ道は就職後にもいくつも存在し、やり直しもきくものである。そういう意味では、「戻れない僕ら」というタイトルはやや大仰にすぎる。

本作の魅力はむしろ、一人暮らしの主人公の部屋に遠慮なく友人が押しかけてきて、他愛もない会話を繰り返す前半部にある。ささやかな日常を丁寧に拾い上げて描く力を磨いていつてほしい。

本年度の応募作七編を概観して感じるのは、書きたいことを小説として展開していく力、物語を納得のいく結末に導く力に欠ける作品が多かったということである。こういった力を身につけるためには、なによりもまず読書量を増やすことをおすすめする。優れた小説や映画に数多く親しむ体験を積み重ね、書くものの質が向上していくはずである。

書くことは、自分以外の誰かに向けて言葉を届けようとする試みにほかならない。だからこそ、書いたものがあれば批評や批判を過度に恐れることなく自らの作品を世に問うてもらいたい。他者に読まれ、作品に対するコメントを得ることで、言葉は磨かれていくだろう。びぶりお文学賞が応募者にとって、そのような成長のきっかけとなることを心より願っている。

(むらかみ ようこ／沖縄国際大学総合文化学部准教授)

## 選評【詩部門】

### ポエジーと魂の美学

松原 敏夫

言語力とは言語表現力でもある。ことばを使って、対象をいかに豊かに表現して他者（世界）に伝えるか。「表現する」ということの中には、想像力や思考や内面のメッセージを含んでいる。ことばは目に視えない。しかし「目に視えないことば」が他者と関わり、内部の自分との対話ができ、意思を伝えあう。「ことば」というものはなんとも不思議な力を持つているものと思う。

ことばを書くことによつて成立する文学の目的は、言語表現の内容を他者（読者）に世界に伝え、感動を与えることにある。「詩」ということになると、境涯に向き合つて感受性に裏打ちされた書く内容を、言い古された用法やデジャブのことばを使わず、本質的な表現、斬新なことば、新しい語法、新しい表現をいかに創造していくかになる。そういう営為をとおして常識的表現を超え、自分のことば、伝えたい内面や事象、人生観、社会観、他者への架橋、自己との対話ができあがる。また「詩」は言語芸術の最たるものであるので、ポエジーを感じさせる魂の美学があればなおいい。

〈正賞〉

「共謀という穴へ捧げる五の詩篇」（酢橋とおる・琉球大学法文学部国際言語文化学科三年）

この作品には詩法に語と語の出会いと衝突があつて、ある現実や内的な志向を背景にした隠喩表現が豊かに表出されている。「共謀という穴」「戦場の抒情」とかはそうだ。「その二」の詩句だけでも、ポエジーがあつて詩的表現のうまさをもせる。読んでいくと、詩的情景が段々とリアルに深まつていく。絞首台、叫び、亡霊、行方不明、「あぶくのような／どつさりの明日」とか、「その五」には、行為や場所の表出が暗示的な流れとなつて読後の余韻を残す。頻出する比喩表現と暗示表現がリンクした出し方は、ことばをとらえ、自己表現への熟達がなければでない。おそらく作者は、現代詩をよく読んでゐる。吉岡実の『静物』などは好きではないか。対象の風景を視覚からイメージのほうに持つていって変容させる方法がよくでている。こういう詩的空間の作り方は、現代詩をよく読んでいなければ作れない。

〈佳作〉

〔Plastic romance〕（かねしる茉衣・沖縄国際大学総合文化学部英米言語文化学科四年）

これは自己悲哀の歌だ。「境界線すれすれの綱渡り」で緊張感がぐつとやつてきて、やがて性的な情景が瀰漫する。今を生きる（生と性のシニズム）という感覚がある。シニズムとは現実とのズレであるが、このズレが詩を生み出す力にもなっている。充たしたい望みとあらがい、渴いた性愛の外界と内面との悶々した関係性の情景が印象的だ。うまくいかないテンポがコケッティに表出されている。この逸脱した感性は空間を還流して作品の空気感をよく表出している。



「喜劇行」（荒井青・琉球大学教育学部生涯教育課程心理臨床科学コース四年）

蚊、鳥、蜻蛉、蟬、はいずれも空中を浮遊する生き物であるが、それと対比して、地上に生きる（わたし）は、何者であり、どこへいこうとしているのかと問う。「ジプシー」とは、自分の生の存在のことを比喩しているのであろう。「車両通行止め」とは、暗示的で、生きる姿の現状を象徴した言い方であるし、生存の在り方を探っていく表現になっている。そこから進むのは、否定的な世を受入れながら「それらしく歌いながら」生きる道である。「喜劇行」とは、そういう人間の不条理な生き方を言っているのだろう。

「人の檻」（豊見山尚樹・沖縄国際大学経済学部経済学科四年）

基地問題をテーマにした作品である。わかりやすい背景だけに、換喩表現を使って、その現実の情景を表出する工夫がみえる。状況を文学（詩）に取り込むには、そこに文学性を立たせなければならぬ。つまり自分の眼というミクロなまなざしである。自分自身の体験や思考や想像力で、状況を見つめ直して、自分のことばで語る。沖縄の歴史と現実を深い視点でみて、そこからことばを出していくことが必要である。見慣れた現実の状況を羅列した語彙を超える視点も必要である。

「卵割」（古波藏唯・沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科四年）

この作品は、自己形成への希求、つまり〈私の確立〉である。「飛行機の音」という聴覚の動

きに感応しながら危機、刺激を感じ取り、内面からの自己形成を図っている。危機にある存在を自覚し、本来の自己を求めること、こういう生き方は青春の感受性から発している。世界にあり、しかし「自分が不在」である地点をみて「自己再生」を図る。この内面での問答は作者の内的な精神を構築することにむけられている。迷いと苦悩から脱出し「自分らしい生き方としての魂」を形成していく姿を描いている。

「永久不滅の麻葉」（秋雨一也・沖繩国際大学産業情報学部企業システム学科三年）

日常生活が充たされることと欠如することへの不安感を滑稽に描いている。欲しいと思っていた「シロップ」が無い事へ「絶望」する大げさ感覚がなんともユーモラスである。ふつうの生活の場面をあえて誇張しながら、ふとしたことから創造する生活へと転換している。「シロップ」を別の方法で手作りして満足する姿は憎めない。些末でアンニュイな感じだが、甘いものへ麻葉中毒のようになってい生活、ばかばかしいと思わず、故意のおかしさを描いている。

「歩く」（玉城琉舞・沖繩国際大学総合文化学部日本文化学科四年）

いま沖繩では「しまくとうば運動」が盛んであるが、疑問に思う点がある。「しまくとうば」が「しゃべりことば」に終始していることだ。なぜ「書きことば」としての「しまくとうば」が盛んにならないのか。この作品が出てきたとき、ようやく、若い世代から、しまくとうばを詩語にして書いた作品が出てきたという喜びである。日本語と異なる（もうひとつの言語） 〓 島言

葉で作品を書くことも貴重な言語表現である。若い世代が島言葉を使って書くことを、ひとつの奨励として選んだことを告白しておきたい。

(まつばら としお／外部選考委員・山之口猷賞受賞詩人)

## 荒地地を生きる

宮城 隆尋

若い世代、特に女性の多くはルッキズムを当然のものとして押しつけられ、性の消費に絡め取られていく。「Plastic romance」（かねしろ茉衣）を読むと、圧倒的な数と制度の暴力によって否応なく消費されていく世代を取り巻く、荒涼とした風景が浮かぶ。この詩には、若さを浪費する空虚な日常への批判精神がある。「消費期限」と戦う姿が既に「醜女」である、という結末は、荒れ果てた世界をやり過ごすためにすれた価値観を身につけることに対する拒絶を意味するのだろう。自己を含めた世代の価値観の輪郭を切り出し、見据えようとする意志を感じる。リアルタイムで自己を含めた世代を客観視するのは難しいが、意志の強さが自己対象化を可能にする。批判を読み取れば根底に倫理観があることが見えてくるが、倫理観に突き動かされる強い言葉はスローガン化する危険がある。この詩にはそういった硬直化した言葉が入ってこない。それがいいところだ。

人は生きていると仕事や生活、他者との関係においてさまざまな障壁と向き合うことになる。それらはほとんどの場合、自分が当初描いていた通りには進まない。「共謀という穴へ捧げる五の詩篇」（酢橋とおる）はそれらの課題一つ一つに始まり、ひいては人生そのものがそもそもも統制できないものだということを表しているようだ。「抒情」という言葉が頻出する。とらえがた曖昧なものがおびただしく立ちふさがるさまを「共謀」ととらえているのだろう。独自の言語

感覚を追及しようとする詩はほかにもあったが、この詩は生に向き合い、格闘する作者の姿勢が読み取れた。そのため自らの言葉でしか表現できない内面の苦闘を、独自の言葉で描く必然性が担保されていたように思う。

生きる目的を自ら設定しなければ、人は惰性に流される。詩人が詩を書く理由も同じだ。「喜劇行」(荒井青)は「蜻蛉を掻き分け／落ち葉を踏みしめ／蟬の抜け殻を横目に見て／車両通行止め」の路地から始まる／ジブシーの行進は続いていく」と書く。暗中模索だが歩まずにはおれない心境が読み取れる。「それらしく歌いながらジブシーは歩く」。その歩みが独自性と普遍性に近づく、近道のない道であることを、この作者は知っているのだろう。

沖縄の国道沿いに走るフェンスの上部には有刺鉄線があり、その針はベースの外を向いている。米軍基地こそがこの島の内部であり、外敵とは民間地に住むウチナンチュのことだ。関係性は七十四年前から逆立ちしたままだ。「人の檻」(豊見山尚樹)は冒頭から社会性に満ちている。檻で囲われ、監視されているのは外からやってきた軍人ではなく、先祖伝来の土地を追われた人々の方だ。終結はおとなしく飛躍がないとも思えるが、抑制された上品な表現でもある。

短編マンガを読んでいるような急展開が中盤にある詩が「永久不滅の麻葉」(秋雨一也)だ。頭を何度も打ち付ける姿は異常だが、滑稽でもある。禁断症状や摂取後の多幸感、幻覚作用はまさに麻葉だが「シロップ」だという。不気味な一場面を描き、その意味を説明しないのが潔い。独善的な語りも不気味さを際立たせている。

頭上を過ぎる飛行機が、飛行機雲を残して消えていくさまを描く「卵割」(古波藏唯)。沖縄の

光あふれる空を割る、一本の白い線が浮かぶ。自己を奮い立たせる言葉は読み手の背を押すメッ  
セージにもなるが、硬直化した言葉が並べばイメージの豊かさは損なわれる。詩として成立する  
かどうかという陥穽の縁を、飛行機のイメージを描くことで渡りきった作品のように思う。まっ  
ずぐな言葉から、生に正対する姿勢が伝わる。

しまくとうばで書かれた詩は、若い世代では珍しい。一部のスラングを除き、生活の中でしま  
くとうばはほとんど失われてしまっている。意識的に向き合わなければ習得できない状況の中で  
詩に取り入れる行為そのものに希少性がある。「歩く」（玉城琉舞）は〈山学校〉に関するかみ合  
わない会話を描く。会話は本当にかみ合っていないのか、それとも相手の言わんとしていること  
を分かっているふざけているのか。どちらにせよほほえましい情景だ。

以上が正賞、佳作となった作品だ。これらの作品以外にも、印象的な詩は多くあった。

「足跡」（ザバス）は同タイトルの詩が二編。〈虫眼鏡で自分の足跡を覗く私〉の姿が興味深い。  
忘却は喪失でもあるが、前を向くために不可欠な場合もある。〈未来の私のための／ほんの少し  
の犠牲〉という一節には、思い出せなくなってしまう記憶も自己の一部として抱えて生きている  
のだという感覚が読み取れる。

「知らない」（丸山紗香）は〈何も知らない〉という言葉で始まる三連からなる。それぞれの連  
は独立したエピソードになっており、具体的で像を結びやすい。しかし全体を結ぶ言葉が見当た  
らず、三つの断片として読むにとどまった。〈不安・不満の燃料で／膨れ上がった気球に乗って〉  
という一節はおもしろい。離れてからようやく相手を見つめることができるというのは人の愚か

さでもあるが、誰もがそういうものなのかもしれないと思わされる。

「さよならの鼓動」（綱取汐音）は喪失感を描く。生活の中で現れた〈空白〉の大きさから、別れた人の存在の大きさをあらためて知る。恋愛での別離、家族との死別などさまざまな別れに通じる情景だ。最終行の〈変わらぬ愛〉で花がキキョウだということがわかる。

「デイゴの花が咲き乱れる季節」（坂本里穂）は後半で〈私は一つの言葉を愛したい〉と宣言する。そのことが〈言葉につながる歴史を愛する〉ことにつながり〈無数の人生に繋がるたつた一つの方法〉だと綴られる。デイゴは沖縄県花で、花言葉は「活力」「生命力」などだ。そのことを鑑みれば、沖繩の歴史を引き受けようとする作者の思いが伝わってくる。

今回の応募作品は三十五編。少ないが魅力的な作品は多かった。ただ中には散文的な印象を抱く作品も多かった。心境や情景を説明する言葉を行分けただけでは詩にならない。散文詩なのであれば、そういった形式を選択した必然性を感じる作風でなければ冗長に感じる。そういった作品にはさらに言葉を削り、磨いていく余地がある。また独自の言語感覚を迫及する詩もあったが、こちらもその手法の長所短所に自覚的でないと、ただの言葉遊びにしか見えず、詩としての力を発揮するのは難しい。ただどんな表現形態をとっているかに関係なく、読み手に迫ってくる作品というのもある。書かずにはおれないという切迫性が伝わる作品には、表現する必然性を感じられる。今回は七編の入賞作をはじめ、多くの魅力ある作品に出会えた。次回も迫力のある作品を待ちたい。

（みやぎ たかひろ／外部選考委員・山之口貌賞受賞詩人）

## 第十二回琉球大学びぶりお文学賞 選考経過

第十二回琉球大学びぶりお文学賞は、平成三十年五月一日から十月三十一日までの応募期間に、小説部門に七編、詩部門に三十五編の応募がありました。

所属ごとの内訳は次のとおりです。

【小説部門】 琉球大学Ⅱ四編（内訳 法文学部Ⅱ二編、工学部Ⅱ一編、医学部Ⅱ一編）、沖縄国際大学Ⅱ二編、名桜大学Ⅱ一編。

【詩部門】 琉球大学Ⅱ十八編（内訳 法文学部Ⅱ五編、教育学部Ⅱ四編、工学部Ⅱ三編、人文社会学部Ⅱ三編、国際地域創造学部Ⅱ一編、保健学研究科Ⅱ一編、人文社会科学研究科Ⅱ一編）、沖縄国際大学Ⅱ十五編、名桜大学Ⅱ一編、県立芸術大学Ⅱ一編。

また、学年ごとの内訳は次のとおりです。

【小説部門】 二年次Ⅱ二編、三年次Ⅱ二編、四年次Ⅱ三編。

【詩部門】 一年次Ⅱ七編、二年次Ⅱ八編、三年次Ⅱ七編、四年次Ⅱ十編、大学院Ⅱ三編。

選考会議は、小説部門を十一月二十七日、詩部門を十二月六日に開催し、既発表のとおり入選作を選出しました。これら入選作を含め応募作の選評については、前出の選考委員による選評をご覧ください。

本文学賞は、平成十九年度に創設されましたが、第十二回目を迎えることができました。残念ながら小説部門においては受賞作がでませんでした。詩部門においては正賞と佳作六編が選ばれ、



十二回目にして初めてしまくとぅばによる詩が投稿されました。

本文学賞が、引き続き県内学生の文学活動の活性化を促進し、地域の文化活動のリーダーを輩出する一助となることを期待します。

（附属図書館職員）

## 第12回 琉球大学びぶりお文学賞

募集締切：平成30年10月31日（水）必着

発 表：平成30年12月上旬予定

あの先に見えるものを  
ヒトなら如何に書くだらう

【応募要項】 ※詳しくは応募要項シートをご確認ください。

1. ジャンルは小説、詩の2部門とする。
2. 日本録で書かれた未発表作品とする。
  - ・同人誌などすでに発表されたものは翌年の対象外とする。
3. 応募資格
  - ・沖縄県内の大学・大学院大学・短期大学・専門学校に在学する学部学生（標準の場合、本科4年生以上）及び大学院生とする。
  - ・ただし、選出において受賞作となった作品の作者は、同一部門に応募することはできない。
4. 応募方法
  - ・小説部門、詩部門ともに、A4判横長用紙にタテ書き、1枚につき30字×40行、12ポイントの文字で印字する。
  - ・小説部門の応募原稿は、20枚以内とし、1人1編の応募とする。
  - ・詩部門の応募原稿は、1編2枚以内とし、1人1編まで応募可とする。
  - ・小説部門と詩部門の原稿を別紙とする。
  - ・必ず封筒にタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。
  - ・原稿の末尾に、住所、電話番号、メールアドレス、氏名◎（本名・ふりがな）、氏名◎（ペンネーム・ふりがな）、大学名・学部・学科（大学院の場合は研究科）、学年、年齢を併記する。
  - ・応募手回しは、直接持参、郵送、Eメールでの送付（メール添付での応募の場合、PDF形式）とする。
5. 募集締切 平成30年10月31日（水）
6. 応募に際しての注意事項
  - ・応募原稿は返却しない。
  - ・個人情報が応募に関する連絡以外には使用しません。
  - ・受賞作品は必ず『びぶりお文学賞作品集』および琉球大学新リポジトリにて公開します。応募した時点で公開に同意したものとします。
7. 著作権の取り扱い
  - ・入賞作品の著作権は、琉球大学に帰属するものとします。

### 【小説部門】

#### 受賞作1編

海外研修旅行（20万円以内）

またはノート型パソコン（15万円以内）

※海外研修旅行を選択した受賞学生には、併せて賞状「海外見聞記」として図書カード「びぶりお」を公表することを義務付けます。

#### 佳作数編

1編につき図書カード5万円分

### 【詩部門】

受賞作1編 = 図書カード5万円分

佳作数編 = 1編につき図書カード1万円分

### 【送付先】

小説部門 / 西原可洋 (国際地域創造学部教授) / 武蔵野書 (教育学部教授)

村上隆子 (沖縄国際純文学会幹事)

詩部門 / 松原敏夫 (山崎口語文芸賞実行) / 宮城隆幸 (山崎口語文芸賞実行)

### 【送付先および問い合わせ】

〒903-0214 西原可洋 千原1番地

琉球大学附属図書館 保存公開課

電話：098-895-8697

E-mail: tsukinawa@to.jim.u-ryukyuu.ac.jp

応募要項はこちらから



第十二回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日 二〇一九年二月二十八日

編集 琉球大学附属図書館

発行 国立大学法人琉球大学

〒九〇三―〇二一四

印刷 株式会社 近代美術  
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地



## | 第12回 琉球大学 びぶりお文学賞 |

小説部門  
佳作

九月二十七日の決意

赤嶺 佳帆 (琉球大学)

『窓際のシュードラ』

運天 香緒 (沖縄国際大学)

詩部門  
受賞作

共謀という穴へ捧げる五の詩篇

酢橋 とおる (琉球大学)

佳作

Plastic romance

かねしろ 茉衣 (沖縄国際大学)

喜劇行

荒井 青 (琉球大学)

人の檻

豊見山 尚樹 (沖縄国際大学)

卵割

古波藏 唯 (沖縄国際大学)

永久不滅の麻葉

秋雨 一也 (沖縄国際大学)

歩く

玉城 琉舞 (沖縄国際大学)



| 第12回 琉球大学 びぶりお文学賞 |

小説部門  
佳作

九月二十七日の決意

赤嶺 佳帆 (琉球大学)

『窓際のシュードラ』

運天 香緒 (沖縄国際大学)

詩部門  
受賞作

共謀という穴へ捧げる五の詩篇

酢橋 とおる (琉球大学)

佳作

Plastic romance

かねしろ 茉衣 (沖縄国際大学)

喜劇行

荒井 青 (琉球大学)

人の檻

豊見山 尚樹 (沖縄国際大学)

卵割

古波藏 唯 (沖縄国際大学)

永久不滅の麻葉

秋雨 一也 (沖縄国際大学)

歩く

玉城 琉舞 (沖縄国際大学)